Osaka University Knowledge Archive

Title	TA (Teaching Assistant) の声　サイバーメディアフォーラム no.8　CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2007, 8, p. 39-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CALL 教室でのティーチング・アシスタントの仕事と所感

大熊 富季子（言語文化研究科 言語文化学専攻）

4 月より CALL3 教室で実践英語 I（教官：ロバート・オモハン先生、受講生：主に経済学部 1 年生）の TA をさせて頂いた。学部の授業の TA をさせていただくのも CALL 教室を使用させていただくのも初めてで、大変貴重な経験を得た。ここでは授業および TA の内容と所感について述べる。

授業内容および TA の仕事

この授業の目的は、①英語を使って基礎的なコンピュータースキル（ウェブ検索、メール送信、Word／Power point を使った資料作成など）をつけると共に、②ウェブ上の資料を使って英語のコミュニケーション能力を高めることである。毎回の授業ではテキスト(Internet English、OUP)を 1 課ずつこなすが、①は全て自宅学習（宿題）で、授業では②に集中し、4 技能をバランスよく入れた活動を行う。具体的には、授業の前半約 40 分は、受講生間で宿題の答えを確認しながらディスカッションを行う。ほとんどの場合ヘッドフォンを使ったスピーキングであるが、場合によってはライティングで意見交換する場合もある。いずれにせよ、CALL 教室では Calabo を使って一瞬でランダムペア／グループが何度でも組めるし、スピーキング･ライティングの選択も自由なので重宝している。その間先生は順番に各ペアに参加しヘッドフォンを通してアドバイスをされる。また必要に応じディスカッションを中断して重要表現を説明され、受講生は先生に習って唱和する。TA は受講生席を回り、質問やパソコンのトラブル対応を行い、前半終了後に Calabo で出席をとる。

後半約 40 分は英語ニュース (Breakingnews.com) のリーディング、または時事関連ビデオのリスニングを行う。いずれの場合も、講師画面を受講生画面に一斉に映し出せるので、前半から後半への授業の切り替えもすぐに出来て便利である。記事を黙読後、内容確認問題や同義語問題を行い、全員で答え合わせをする。また受講生は、毎週 1 回自宅でこのサイトを見て、次の授業で取り上げたいテーマを先生又は TA にメールすることも宿題である。この宿題により、最初は英字ばかりの画面にたじろいだ受講生も次第に慣れ、多量の英語をざっと見て関心のある項目を選ぶ能力が養われたのではないかと思う。

所感

受講生が 46 名と大人数にも拘わらず、Calabo のおかげで出席確認もペア・ディスカッションもスムーズに行うことが出来た。その一方で反省点が 2 点ある。1 点目は、最初の 2 ヶ月近くは Calabo のシステムに不備があり、ヘッドフォンを使った授業が出来なかったことである。特に最初の 2、3 週は私達の使い方が悪いのか、システムに不備があるのかがわからず授業を中断することがしばしばで受講生に迷惑をかけた。2 点目は WebCT を使わなかったことである。私は WebCT の存在を知らず、先生からの要望もなかったが、学期末になって他の TA の方に聞いたところでは、WebCT を使えば受講生とのメールや資料を全員で共有できるので、より効率的に授業が進められたのではないかと思う。

また Calabo に関しては、画面も見易く操作性も良いが、改良されればもっと便利になると思う。例えば受講生の名前は現在漢字表示であるが、ネイティブの先生には読みづらいようなので、ローマ字表示に切り替えできれば便利だと思う。またペアレッスンの際、例えば話している受講生の座席がカラー表示されるなど、誰が話しているかが一目でわかれば便利だと思う。そうすれば、余り話をしていない受講生同士をペアに組みかえたりして、全員がまんべんなく話すように調整し易いと思う。更に操作マニュアルも機能案内だけではなく、トラブル対策例も充実すればより広範な機能が使えると思う。

以上のように TA として貴重な経験をさせていただいた。今期の反省点をふまえ、来期は一層充実した授業のアシスタントが出来るように努力したい。

TA として CALL 授業で学んだこと

藤井 美紀（言語文化研究科 言語文化学専攻）

4月から金曜3限のデボア先生の授業でTAをさせて頂きました。

デボア先生の授業では、リーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの4技能を様々な教材を用いてバランスよく学習させています。授業では、まず、TAがそれぞれの学生にプリントを配り、学生個人でそのプリントの設問に解答させ、その後ペアもしくはグループになって相談させ、最後に先生が解答する、またはプリント提出という形式が一般的です。

その中でも、先生はスピーキングに関して、限られた時間の中で学生が出来るだけ多くの学生と会話できるように、CaLaboEX の「ペア・グループで会話をさせる」という機能をとても有効に活用されています。その活動の一つとして、文章の順序並び替えをさせるというタスクがありました。扱う内容としては、日常会話、経済、科学、文化、社会、福祉など様々な分野があるので、その内容をより理解させるために、まず先生が専門用語についてイラストを交えて板書し、とても分かりやすく説明されます。語彙の意味が明らかになった上で、先生はその語彙を含む文章をランダムな順序で読まれ、学生にディクテーションをさせます。そして、まず学生個人で文章の並び替えをさせた後、CaLaboEX の「グループレッスン」という機能を用い、無作為に4、5人から成るグループを作り、ヘッドフォンとマイクを用いて席を移動することなくグループ内で相談させ、正解を導かせます。

また、その他にも、配布されたプリントの質問事項に各々の学生にまず解答させ、「ペアレッスン」という機能を用いて、ペアでそのプリントの内容に基づいて会話、またはチャットをさせます。一通りのやりとりが終ると、先生はペアを自由に組み替える機能を用いて、学生が出来るだけ多くの人と会話・チャットができるようにします。

これらの活動において学生の反応はというと、今度は誰とペアになるのかという期待があることや、今まであまり会話をしたことのない学生の情報を英語でのペアワークを通して知ることが出来るので、非常にはつらつと楽しそうに行っています。

また、教師のみがコンピュータを操作するのではなく、学生にも積極的に活用させる機会を設けています。その活動の一つとして、英語版のあるニュースサイトのビデオを見て、配布されたプリントの設問に解答するというものがありました。それはまず、先生が各々の学生のパソコンの間に設置されているセンターモニターに利用すべきサイトを提示し、ここまでは教師の役割ですが、それに習い学生もインターネットのサイトに接続し、学生自身が自分のペースで、そのビデオを繰り返し見て解答するというものでした。また、その他にも、各々の学生が外国のニュースサイトの中から一つの記事を選び、その要旨を英語でまとめるというものがありました。

しかし、学生が自由にインターネットを操作できることによる問題も生じてきます。それは、検索するように支持されたインターネットのサイトではなく、それ以外のサイトを自由に見てしまうということや、英語のニュースサイトを見て要旨をまとめるというタスクにもかかわらず、それが日本語で説明されているサイトを探してきたり、日本語翻訳サイトを用いたりして、日本語の記事をもとに要旨を作成するため英語の学習にはならないということがあります。コンピュータを使用する必要がないときに、また、ある機能を使用してはいけないと知りながら、瞬時に様々な情報を提供してくれる魅力的なコンピュータについ手を伸ばしてしまうということです。

しかし、そのような場合を考慮して、試験などコンピュータを使用すべきではないときに学生のコンピュータを制御することや、学生が今どのようなサイトを見ているのかを確認するために、それぞれの学生のコンピュータ画面をモニターするという CaLaboEX の機能を用いることで、完全とはいえな

いかも知れませんがこれらの問題を防ぐことができます。

教師にとってCALL教室はとても便利であるように、学生にとっても同じ様に便利であることが分かりますが、その便利さが少し異なる方向に働くと、不正行為という残念な結果になってしまうこともあるので、その点をよく考えた上でCALL教室を使用する必要があります。

また、CALL 教室では従来の授業では不可能であったことを瞬時に行うという恩恵を施してくれますが、その便利さ故の問題もあります。それは、教師と学生がコンピュータの介入によって間接的なやり取りになってしまうということです。しかし、デボア先生と学生のやり取りを見ていると、とてもそのようには感じられません。というのも、授業の始めに先生は全ての学生の名前を呼んで出欠確認をされ、学生も挙手すると同時に元気よく返事をしており、それが授業開始の潤滑油となってその後の活動をスムーズに進行させていると考えられるからです。また、先生のユーモアに富んだ板書しながらの解説により、学生はコンピュータの画面ではなく先生に注目し、そこでも教師と学生の直接的なやりとりが行われていると考えられます。

そして、私がTAとしてCALL授業を通して感じたのは、従来の授業のように教師と学生が直接やり取りをする中で、明確な目的を持ってCALL教室の機能を活用することが大事ではないかということでした。これらのバランスを保ちながら90分という限られた時間の中で、学習の効果がより上がるようにCALL 教室を使用すべきであると感じましたが、効率性という言葉にとらわれすぎてしまい、授業の中での教師と学生のコミュニケーションを大切にしなければ、結局はそのコンピュータを使用する意味がなくなってしまうのではないかということも感じました。私自身、この度初めてCALL授業をTAという教師と学生の中間にある役割を通じて、その長所や短所などを今までとは異なる視点から経験することができたと思います。今後、さらなる機能を備えたCALL教室ができ、コンピュータを用いての授業は増えてくると思いますが、TAとして学んだことを活かしてこれからのCALL授業に関わっていきたいと思います。

最後になりましたが、このような大変貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。